

25.12.4 8日

大淀川の水質改善

環境基準3年連続満たす

国交省調査



国土交通省の調査で、水質が改善してきていることが分かった大淀川

国土交通省の水質調査で、生物化学的酸素要求量（BOD）を指標にした大淀川の水質が近年、改善していること

が分かった。同省宮崎河川国道事務所によると、年間平均BODは調査初期の1974

（昭和49）年、大淀川上流で6ミリ以上を記録。しかし、近年は下水道整備が進み環境活動も活発になったことで、大淀川全体でも2012年まで3年連続で「サケやアユが成育できる状態」の2ミリ以下にまで改善した。

BODは水質汚濁の程度を示す指標の一つで、人による汚濁のない河川では1ミリ当たり約1ミリ以下。国が管理する河川の水質改善が全国的に図られたため、同省は25年以上続けた平均BODのランキング発表を今年からやめた。

同事務所によると、畜産や工場立地の盛んな都城市の市街地を流れる大淀川上流には生活や農、工業排水が流入。調査初期には志比田橋で6・2ミリと、高い数値を記録していた。近年、下水道などの整備が進み、環境基準の2ミリ以下を3年連続で満たすまでになった。

同市下水道課などによると、大淀川につながる旧都城市の下水道普及率は1980（同55）年の30%から2013年度末時点で82・68%まで向上。農村部が対象の農業集落排水処理施設も04年までに市内12カ所に設置された。市民による浄化活動も一役買った。

同市内で川遊びや環境について学ぶイベントを主催している都城大淀川サミットの漆下信芳会長（84）は「確かに大淀川の透明度が増した。ようやく良い川に戻ってきたと実感している」と語る。

同事務所調査第一課の東和彦課長は「BODだけでなく、ごみの量や生態系の豊かさなどを含めた総合的な水質を、より細かな地点ごとに考えるべき」と話している。

同事務所によると、畜産や工場立地の盛んな都城市の市街地を流れる大淀川上流には生活や農、工業排水が流入。調査初期には志比田橋で6・2ミリと、高い数値を記録していた。近年、下水道などの整備が進み、環境基準の2ミリ以下を3年連続で満たすまでになった。